

日本学術会議

認知障害に関する包括的検討委員会（第 24 期第 3 回）

議事次第

I 日 時 令和年 8 月 28 日（水）

（※会則第 31 条による委員会における議決方法の特例により、メール審議を行った。）

II 審議内容

提案 1 学術フォーラムの開催について、別紙 1 のとおり申請してよろしいか伺います。

III 結果

提案 1 について承認された。

令和 元 年 8 月 15 日

日本学術会議会長 殿

第 二 部部長 石川冬木
「認知症に関する包括的委員会」委員長 宝金清博

日本学術会議主催学術フォーラム企画案募集について（回答）

令和 元年 7 月 1 日付府日学第 322 号をもって依頼のありました標記について、下記のとおり回答します。

記

1 フォーラムのテーマ 認知症---予防と共生に向けて学術の取り組み

2 企画趣旨

少子高齢化の課題は、日本社会が直面する最大の課題であり、学術を含めた社会の基盤に関わる問題である。この少子高齢化は様々な問題を惹起するが、最大の問題は、認知障害を持つ人口比率の急激な増加である。

認知症、あるいは、軽度認知障害（MCI, Mild Cognitive Impairment）の増加は、社会や学術への好影響は想定しにくい。一方、少子高齢化の先頭に立つ日本の取り組みは、世界の課題解決にとって極めて大きな意味を持つ。また、認知症との共生と予防への取り組みは、多様な価値観と生き方の共生を目指す次世代の日本社会にとって、重要な方向性を示すことが期待できる。

これは行政だけの課題ではなく、学術組織が総力をあげて立ち向かうべき重大な課題である。この点は、日本の展望 2020 においても、強調されるべき点である。「認知症の治療開発」は言うまでもなく重要であるが、時間のかかる非常に困難な課題であり、近未来的には、認知症との「共生」と「予防」に注力すべきである。

認知症、MCI の課題に対する学術の取り組みは以下の 4 つの視点から考えられる。

- 1) MCI に対する医学・健康科学からの予防的アプローチの視点
- 2) 認知症との共生を支える技術支援・開発（環境・都市工学なども含めて）の視点

- 3) 認知症との共生を実現するための人文科学の視点(教育、人権、法制度など)
- 4) 認知症の予防と共生の持続的発展のための財務基盤、医療経済的視点

これら4つの視点は、明らかに、日本学術会議の全ての領域が横断的関わるべきものである。しかも、議論に十分な時間をかけられない喫緊の課題であり、日本の学術の総力を挙げた即時性の高い対応が求められている。

今回、「認知症—予防と共生に向けた学術の取り組み」をテーマとして、学術フォーラムを開催し、上記の観点から日本学術会議の関係者の取り組みを紹介し、国民と情報共有する場を提供したい。

3 希望開催時期 令和 2 年 1 月頃(平日開催)

4 コーディネーター 宝金清博(第二部会員)

5 演題・演者等(予定、交渉中のものも含む。)

- * 認知症と社会制度・佐藤岩夫(第一部会員)
- * 認知症を診る・遠藤玉夫(第二部会員)
- * Society 5.0が支える認知障害・萩田紀博(第三部会員)
- * 認知症と生きる社会・白澤政和(連携会員)

(次第) 概要(仮案)

13:00~13:10 10分

【開会挨拶】日本学術会議(会長または副会長に依頼)

13:10~13:20

【キーノートレクチャー】10分

宝金清博(第二部会員、コーディネーター) 認知症と生きる社会と「学術」

13:20~15:20

【講演(上記予定演題)】各30分 計120分

座長 平井みどり(第二部会員)、山脇成人(第二部会員)

- * 認知症と社会制度・佐藤岩夫(第一部会員)
- * 認知症を診る・遠藤玉夫(第二部会員)
- * Society 5.0が支える認知障害・萩田紀博(第三部会員)
- * 認知症と生きる社会・白澤政和(連携会員)

15:20~15:30

【休憩】

15:30-16:30

【パネルディスカッション】 60 分

座長 石川冬木（第二部部長）、小松浩子（第二部会員）

*上記演者

*厚労省オレンジプラン担当者

16:30-16:40

【閉会挨拶】 10 分

日本学術会議（会長または副会長に依頼）

6 関係部の承認の有無 第二部で承認済

7 その他希望事項（開催場所等） 日本学術会議（東京）での開催希望

- ・経費負担の要否 要
- ・当日の担当職員の補助の要否 要
- ・当日の委員会等の開催予定の有無 有

- 注) 1 企画案の提出に当たっては、上記 1～7 の項目をできるだけ詳細に記入してください。特に講演を企画するに至った企画趣旨は必ず記入してください。
記入漏れのある場合は、書類不備扱いとなり、審議されない場合があります。
- 2 演題・演者が未定の場合には、分野だけでも記入してください。